新刊二度掛子扇

七

へ7
4375
6

門へ7
4375
6

都太夫一中直傳

都羽二重掛子扇

板元　文華堂

廓外壽
常盤前道行
同　妹ヶ宿
栗之帳
天網寫

都秀太夫千中　都冨士太夫可中　都節太夫吟中　都華太夫以中　都太備太夫童中　都國太夫半中　都三壽太夫延中　都梅太夫鶯中　都北太夫五中　都岸太夫鯉中　都東太夫呂中　都以名太夫三瓶

都太夫一中　都雄二　都路助　都椿半　都以十　都米八　都駒次

都京太夫有中　都栄二　連長　都六二　都松蘭

島田藏書

廓丸壽

丸出たる若いれ寿丸おいろ

見ぬ月つゆてひうゆたまうれば

百文十年以ぜん二万三百六十

家坪丸地所をなりけ所へ

移されて今は廊を新吉原と
ゆせば孤月出たい色里で
ござる猶子代延と君がてゝを
ことぶき山谷風流れのほを
諸君子方へゆうれがさてゝで

おもるゝゆきんと扇延元立より
先沙後せよ西小如じゝふ
籠波れ山陽も曙白金日孤子丸
腰巻羽織伊達衣揚屋もろき
内馬ふちる殿様子弱とゆんお

ゆぐごとちでそれなこゝろと
三浦屋れたぐをもつゝゝら
ちゝ茶やれ下若ふりれを
おりゝとて移香さあぬ衣くふ
[illegible]ゝれ井もいてとひてれ柳

たる節ふのれのふ弾ひをゞ
きふてんてうきんと打こんで
若ゞ伝泉と思へずをゝや草れ
ぬゝゝも出れ床人目あるうで
通へむのゝふおびを松山面道

鶯ぐひすの出いでの三よりぐ
閑雅を寄せて嬉しき数多の筆賞も
一色を侍ふ長柄日とそつそ
振出しの八ツ橋「なげぶし」おろしのゆそふ
左り猪口きけ里れ分るいまどつと
なあてとかくる掲げくれ
あり鳥ゝ沖る夜其夜の初雪を
酒ふのうして月とういさふ
冥れ盃同き君の子代まもくと
くりことをいとお歌さんちも

うめちやも香かゝ匂ふ太夫格子

花の葉は扨も綿こきはぜて

服ふ望ぜんぜんをぜんゝ

菓とゞ祝ゝ新

寿

常盤市前道行

須い陸月もゞめつゝ

夷めきるゞゝさへのるふ

袖ゝつらゝ時まゝ奴常盤

御前い左盤市本の下合ふ

行遥よ夜深き空や世せり
ひのくべ入りぞ時脊丈森いり
ぞ抜入り朝いつきなきむく
おきふいたまそとして手若れ
爰をい毎ら情ふ泣森へせし
いとしきよ入り若いおとなしく
東のくびふもぐきもめ乙若れ
子を引て先ゆきるきゆくぶり
小太かもれたる腰分いさ形ぐら
父丈情新ぞと泪ふ涙果しなく

ふのびつけたる顔ぐせもいとで
傾く笠れ君おもらひ川く
見渡せば桜ぐ門田小若葉つむ
東寺四ッ塚鳥羽殿を諸国れ
姫をたきのせて御代れ貢の斗車
ものれ君ふとぐろのむ
ぶれぐもうちのせておくれ
見送れ姫へせかへ女ぶれ
うたるふたつ唄うたふ初恵
梅小手とる鶯れ廻い君り

たゝまれて海ぐうたこゝれ
初音聞おのゞさまゝ
変なれや人は海も若みどり
井田は墨ふまてゝ見れば賤ゞ
ゝらゝ白もみゝじめ縄かなゞ
ゆづり葉ふゝ〳〵ふゝ〳〵ぶくゝ
門松ゞ枝は小敲や老教有げる
新玉は年も若やゝ行ゝ〳〵
あゝい和ゝく柳のめぐゝ出代も
家へ海ゝまゝ万家鳥遊とりくゝ

要い旅ちゑ折らるれ花神まり
ゆく掛まる氏ゑい二ッ三ッ捕ゞ
ものつ牙れ強ひゆゞゑ濱民ゐ来
子孫繁昌ゑみうたゑれと石れ
鳥居の二柱ゑりれ親の家づゑ

小ゑゑ八幡山道ものゞれ
来宿を今者石い沙流ゞて
芝ゞ源氏れ氏神ゑ我ゞ門出れ
吉凶右と沙ゑを合せ給ひ
ゆゑび兄を弟ゑ孫ひ若ゑ

斗若も乳房はしをふまを合せ
さうくとのたまふ母こそ
御袴ゞを父義朝はしばしば
さこそ悦ひあたゞひなき
若どもを母ゞ被はしをのみ
堪忍ぶまうと者を
きつれ行末を思へばいとゞ哀深
家系一ツはしるべし　其人は
深谷立意の百姓は源蔵
のまゞる事ふ事こらく侍ゞ

朝ぼらけ宿をして三里ふたゝび
出ばこゝもつらんぞ氷りのこし
こゞへ居ふるをぐ墨染や樵れ
寺に入相ふる鐘ひとどぼれ
名も伏見ふる書ぶひあれ

妹ゞ宿

風吾れ音冥さへも静なる
竹ゝ円れ一ツ庵猫乃通路
跡つきゝ只一筋れ道なそく
蛇穴ゝ入ふかまゝ立て安れ業ふ

おとゝあゝ門裏紙を結ひ継ぎ
書揭るいとあ廉ゆゝしゝ雪を
りて来新「常盤山前ハ焼失ス
新を仮ふ給ふ大和へ下る女房
特者を宮ぐ者ふ道を矣なふたり

一夜ハ情とのたまへば「十八九
女房ハ孤獨ハづまへ多へんゆゝ
親子ハ人を使ふゝとゝ足事せ
いゝゝハ有様ゝ お宿事せ
たくゝ人多ハ須手家ハ使ハと

まして義朝は由孫をいつよく
禁位のひがん人くは侍有様
ものめんい必定へ自い家迎
後九郎盛長ひがし妹源氏信代は
りはなれるもの孫なの孫なて

平家は侍源平家清は悪
妻ふなり侍ふ今ふも文家清反
来り給ふ夏めをこそ見なふ
らめ情なしとは思しそよ
家いかうくさゆく

仏国へ成共落なんと念願れ
何の世に成共打消へかりし
常盤山前い者も切かも落て
先へも行共迷い家に成
どうしても此運ハ仕方とも
角も入り青い愛ハのうさんと
大ー風なる形れ書ハ袖れ
徳れういの人を愛嬢れ床と西
のせ笠をかべて屏風とし
青い製帳ハ国ハ書れ風も

寒ゆりしゑれなるこゝろとぬり
捨て其身ふ浦を打掛く
ひとれこゝろふ小夜衣浦
それ夜を明るこゝろ　合
同なくこゝまなくんなく思い

こゝがけがめくふて寒風さつくと
怨愛て人はきこつふきを渡り
肌をさけ事をそるどるなれ
ごとくなれがいこゝろやあよい
ゆきたる身を寒乳ふ破られ

おのゝ姫をくるまもまで
くたへぐるゆとはゆ伏まろび泣後
不覺ふ見へなふ「入う若乙若」若舞
なふいうふせんゝかれしゆと
額を押へせるをなでいふ乙若
母上様がゝんふ抱きせまゝ
せんと「見守いるまてふ常とま
牙牧なる小袖をぬいで母上様
裾や抱ふ取室打室家いとゝで
うづめる雪丸保牙ひのもれあり

ミテからく
母いくるまさ拵を工偖いとこれ
子供やなかどうり母を大切ふ
いうふ孝行なれ迚ことごせ
迚をこづへさうせ母もめうがふ
つくるそやうこ子い息文ふ生立て

足元をそ修業孝行なれ
風ぢ〜引なる風〜弟ふと
弟せれば母ふ看せ
口真似
イヤ兄くい家かく侍ひれ
習いおいう師弟ふ事〜と

能歌と詞ん河寒しつゝ
あんど迎歌小後をえんぐまち
寒いとい家ひ若よさらいと
おばさとかえとかひくきびゆ
のたまへむ可見ん〜そひ

出てえ自在えん寄小衣をぬぎ
同じく毎小若まもせる足る
ぬるひこぐゆもど其いもせび
もぐきしこぐぶーをぬぐり
こらゆる体 毎の家もきん

内もとゝみゝ情をも法師も
百万家詩は大将軍とものふゞ
ゞ日若とゝふ一童はきぬを
笑ひぬるいいうをある神はとがめ
そやいとをしはつるもなな
御身達は志強帰りなれば
舟い若狭ども喰へふ便は者よ
こちらそれと三人一所ふ引まて
いだきあゝてそぐ泣ぬよ理り
せあてゝ哀へ月も夜まふ更

行べ法華経を京清女ハ庵か
思ひしぐ雪ふる梅ふくん新い
何者ぞ法ゆ事と傘ぎし
絶えんべ常盤親ふか谷ぬし
御代ハ泉ごぎんなんのまさじ

もれと身づろうれ猶もこと
うかぶふもど意思ゆるこれ春を
ぬる舞さひぐ源氏ハ根ごうこ
ぶッハいううきよこれさよ今人々
たそけ迎源氏の運ハまるべ

つれゆきさぶらひたと
かゝめとうたり世をそんじ平家ハ
滅果数ハ長久かもをもゝじ
情をゝぬい匹夫ハ勇ことふ
家素ハ為ふい主君を彼見助て
蔵さうと思ひ〳〵ゲイヤてあり
主君清盛公ハ世間境をけつて
源氏ハ家数をさゞぐ出ぶぐき
仲をかゝむり助て道たゝび
かゝめとうてい情をゝとさつ

ふいの男業にて さの段仲光
戸をたゝゆべ 女房いしゞの戸れ
ゆきうちゝの 名打掛こうんびもきく〳〵
はひ入かり 合うあいことなり
家へはふ先蓋と取出てさんり

ゝ毛うさてめ〳〵ゞ泉丈れ
機嗅をうかゞひ 宗清度
負へ源氏ゆ家い平泉すし
呂入うゆも義朝れ不孤とはゞ
いりゞしなゝそ 「ゥ」 ゝ云迄もなし

主君清盛公は仏御前いふ
おとこゝを主殿司通用捨いあつた
月ふのうらびかゝめえて六波羅
殿へ引立る只仏御前もなぬ仏
冥ぬぐ花と言ぬぐ親子は人は
はれごゝはもふ元ゆうふ門へを
宗清冥ぐりヤレ小島は彩ふ合て
かゝ清ふまふアレ追ふ掃へと云れば
早ふ清ふもぬこゝ雀は羽をあゝ
弓ふ折ふ次第ふ仏番ふ一ト次は

仮まくさせていれく為ひそ
もや所も更ぬ床敷し音せで
おのれとやける「イヤ」命へ殺生好
鳥は色を冥そいとりでに命ぬ
「女房」さらふぞそんせば所為く
とある鳥なれば追とも打とも
立いせぬ「エヽ」ふ合点ナ女ぶなる
いで追のけんと弓と矢引て矢番
「女房」いくれ新発ゐんと引番
「ヤヽ」りぎもるゝはものひそそ矢

四人本さーつめくいるゆどか
常盤御前は兄弟を前後たちか
ゑきいだきたうくく逃退ひあり
宗清とつくと見送りてはれんよ
女房達ともが逃つるはは雀を
殺ざうせておこどぶ右前立ぶきら
たぐ仏の事もつえぬぶかとけ
合矢ぶいたら女房とかうれ
言葉なくはつ教母しやとみを
涙しぶふくれぶ佛有がぐ記

はんにや連源胃が月ぐくんて
宝殿といもきくんいの門の若折へ
法しおの極ふさつくれてる年屋
ふも侍ふいうぐと案しくびあしふ
ゆるいはは月嘗かむり源きはは思実
親ふもふふも兄弟ふも七郎万宝
ふも男ひとりのへぬぞや若君
達も常盤極も山恩ふたま
たまいぐとへむ一ツ〳〵常盤を
云君を耳てのい清盛ふへ手ぐ

義理立て思い詰めて
うねづき合しを聞付妹背
と申こと有りし紀義九良盛長へ
常盤親子ふ仕合てゆりし
ゆうしを冥ゆうも宗清ぶ敵矢へ
妹ぶ二人ういぶ
立て事れゆうしを冥とぶ
撰ぶを打て感じへいうふ
宗清度色白妹ぶ兄義九良
盛長こん雅ふそうて妹を

元殺ごとんと膳夫をうせん為
色道の未うまぐ若君道をたゝみ
らもこゝ戻り扨志まぐせこふ
ヨ次もぐ已一礼の為對面せんと
呼ぶれむ宗清かんらくと打笑ひ

はゝぬぐうり扨蒼ぐ来て迄なる
ことをさへづるよ孫なる某平家扨
孫をこゝむりるゝ源氏方扨
禮をうゆけ宗清ら立居まひ
うろたへる羽鳥ら羽鳥

將人は遠ざけ綱をゆるゝ舟ふ
とらんなるゝ〜ゆさ〜と花は
ゆるぎを問そだて初音をよつよと
云ぶれば「盃長恨ひ合点〜て
す新たし因面は唐衣の紙踏ふ

立ゆり源氏一味は友千鳥大ゐる軍は
羽ばたのうるゝたる雄い白鷺や
羽ばいる鳥は翅を広げる秘音は菓立
きて〜ゝ見る鶴は花をまんを見せん
「ヲ」いそぎやいそぎ酒とりは

山鳥は尾のながうて長居いたれ
お眼とゝつゞ宮や鶏ぐいる東路さして
飛鳥はとぶぐめくゝ下ゆるんゝ
さうびぐ大島やゝ望一トゝ孫氏は運
来新毎ゝうゝ宮へ参る

栗は殿

宴ゝ酒ゝうれをとゞめ色い仕渡ぐ
篤ゝおゝゝ酒ゝ基訪は
御身はうへ扇の橋は別ゝうり
いとゝゝゝゝゝゝゝゝ道

実ゆやむしり世のなかべ
栗ともひへとも志るまじきふ
今いうき月の栗烟島をひ
小屋の兵粮賤ごと業を選れ
月さへ涙の関屋て泣明さむし

月の〜島面とも〜ぬさごろ
ものの安寿意〜やうやうれな
冠子の意〜やうやうれなほうれ
右れ〜け栗をはれむ島れ
恨〜や家の丸何とるるれ

恐る〻こゝらうてあるこゝける
「鴉言れ山賊た草籠せ負通つん
ヤアくいつれ言同ぶ鳥追ている
なぶつてけんと立寄こんく
女面白う鳥を追へ恐きこんか
ひつませてやらう早うくとせつたを
「こんなれくやあいおりひれ
ひるゆへか恐ーと手りあびぐぞ
面白う鳥を追へとつまを行るう
面白う恐しきこんか逃せんとか

ゝ云ごとゝまつりは何國の國
いづくれ鳴日にれ本れ地いよりも
さらぬ海ゝ限りも浪れ六十六國
三千世界ゆくらゆゞれい雪ゆを立ぬ世
ごとくそしけ日れ本を雪ゆ辺ゝと
いまぞうしけ雪れ中ゆこそ
ゆるゆいはるゝめゆるてたゞよ
くくるゆ姉ゆ月へぬうほうれゆ
ゆいるまうゆれゆ稲ゆゆ
れるゝ風ゆさゝぐはぞれ

むらくもつと羽をせうら風
さらさら鳴子音がかろう
よしなやそ家のひろもせあ
ひのぬ小島はさらがしやせ
三下り
アル小雀ぐチャくりチャト家を女と
笑ふよ怪やみくや月夜月夜ら
子のらひぐらむきつりもいり
巳ぐさはくくと色くく鳥は枝ふ
もらいう鳴子はるはるとて
かくく唐へいゆじ秋津洲は

門外は神の恵もあまら安き
恵しや對ふる恵ありうれん
くと泣くる女は花後をを
たまそれ〳〵そら〳〵はなれな
見〳〵こら〳〵はなれな後よ

あれよと立逃ほうれんか
よい慰と一度ゆどうとゞ多ゆ色
「ア」女をなぶつておりゆや思ひ
まらせん男人と杖逃とり
なぐりて追はべ逃めくと

ちりくゝゆかおもきぬ
青人れはりもそばくゝ
立遠ゐせたまづまうづ栗畑
籠れ庫ゆ姫くもつゝ泣へり
あまらり待ひ物れ

三ノ巻

草葉ゆ露の雫もうき
ぬうりぶ生れ殊も南を洞寓れ
大長寺数れそとりゆどうくゝと
流れみなる樋れ上を家形所と

天れ洞寓

はきかあり「なかいつ迄ちかく
ひゆゑても愛で人れ死ぬ場迄
定りし詞もなしいぢく愛を
往生場と子を死去ぬ座しけれバ
「去でこそ死ぬ場いいづこもおなじ

事と云なかしきしが道く
思ふも。娘かりが死ぬ良なかへて。
小麦と次まれとん中と御宿なる。
お三様与り私ふて殺まそくれる
殺父またとはいさうさとり

このせし其あをを及ぶ大事れ
男をそれすしてそれんをぶさひ
一度流れ勤の若義理ちゝば
いつとり者と世れんれぶ方人とり。
お三極ひとりれさびゝぶんみ
極ひとりさびと思ひ事れ
遣ひい色一ッぶをこゝで
殺しそこ極さうんどこそ本を習
つゞと服でと打ちたまこどゝべ
とりふうどを法「アテ」ぐり極事

ぞうり。お三い留守ゆえ、くさん。
眼をもとべ他人とく離別れ女ゆ
何れ義理道をぐらもいる通り。
今度れくぞんどこんどの先れ
世迄も。女夫と契るけふう。枕を
あらべて死るふたまぐそくるる
往ゆ行るむ 其離別い往ゆ業
ユーりこれ糖ぐち松ゆれ
死ゆをしてたとへけ身い蔦ゆ
はかれてもぬうりゆ魂つきまつう

北嶽へも極楽へも連立て下さん
せと又伝ちづきなるきめんで
了それよくばけらうだい地獄風。
死ぬれば宝ふ返す後生せう。
くらせぬ夫婦ぶ魂放き反ちるし

合点ちうと服元さんそばと積むかし
元結ざいちり系髪ふつと
切ってそもんや小実ひ髪ん有間い
孤や次三郎と云さんぶ髪きう
たんむ出家ん孔子。三界ん家を出

妻子眷属まぞくれもあれ法師
おこといふ女房なりけるが。おぬしが
立る義理もなしと。涙をながふ
投出し 「手」 婦もうごうんをと
小妻も。服をぬいで洗つをれつ
捨つゝ。むごやを。しのび投鳥岡
もらりと切て投捨る指壁れ落
涙事れ事とも乳ぬるひのとれさま
うきせをのがれし尼法師
「文」 婦れ義理とは俗の昔とをれ

事ありうもうと。ゑ不場もすへて。
ゆとりけ麺れとを山ゆるぞ〳〵。
それゑゞ家れ場ゑれいゑけ流
ゆて着くり。家れいあり。けゆゞ。
捨ゑれゆも所を習て。おこゆたぬく
んれ道其うへ帯これたへと
若け茶れ色も香も春れ風ゆ
ちりめんれけせけのれ世のぬゑへ
はゑり麺れまれ板ゆまうゑと
くり先を結んと狩場れきゞれ

妻ゆへ家を着たまくる罠殘び
家とことごとく死ぬごーら可哀
月もくれんくもこ殘そんそれで
死なんもう所を踏て死ぬれで
そばかいるのもよーしまくと

くをを見合めで死ぬるひと思ひ
さうでやうをなるまゆうと
思へばいとしれくと止め兼たる
赤のび泣「着くる」新も咽つくも
死ぬるかおろれ何物をしない

こゝふ家をこれ。最期其念の孔
さびしさ。西へくゝと行月をあまと
ねゞ。月を放さびし。只西方をとゝし
里あん於へん殺り其ゆゝべ
云て死ふや 何ふもなゝく。

これさん定めて如うれて逢れ
申ぶ家ふのろれ。所はる
毛よんなゝ申いゝ出しなろう
志あれて親ゞ入う死ぬ方も
何いなくもも〳〵可出せ

痳病をわづらひ是だをつらハ
てんきぬとあつまとぬかして
浅きゆづむ悪もはしらふ
むしがらひ袮でしもあれて
悪名ハ今ぬれ衣をとふや迚
いとゞ悪口をそへられけるアヽはれを
耳や。ぬれ衣をきれどもへむらひけれ
あらひ。殊に男は事に誓紙一枚
書たびに。熊野の烏がおゐそ
三羽づゝ死ぬると。むかしより云

伊へぐぶ家と云ひ新玉は
年はもじめかきそうは書初
月はもじめ月次ふのきし
拵紙は数くしは其度事ふ三ヶ月
殺せしかくひい紙むくそも

乃ふいうもつくくと耳へ今育は
耳へへ其殺生は根のつく
むくひくくと耳ゆるそも「むくひと
待ぐうぶ「家ゆへうらも死をとる
ゆるくてくれとだまようくきむ

いやこゝゆへとあるあるてこの四と
くを打のき祢源かとゞまた
ごんれ髪壁辺れ風か氷ありり
後ふひゞく大長寿れ鐘の声
かむ三宝なゞきを支婦ゞ
命のみゝう法とあるうた
ぎんぜうか厳孔へ今そとゝあて
ひとまで弥る死魚か法歌孔ひな
のこゞとふつと魚れぎろくと
弟ふこゞくてもひるゝ

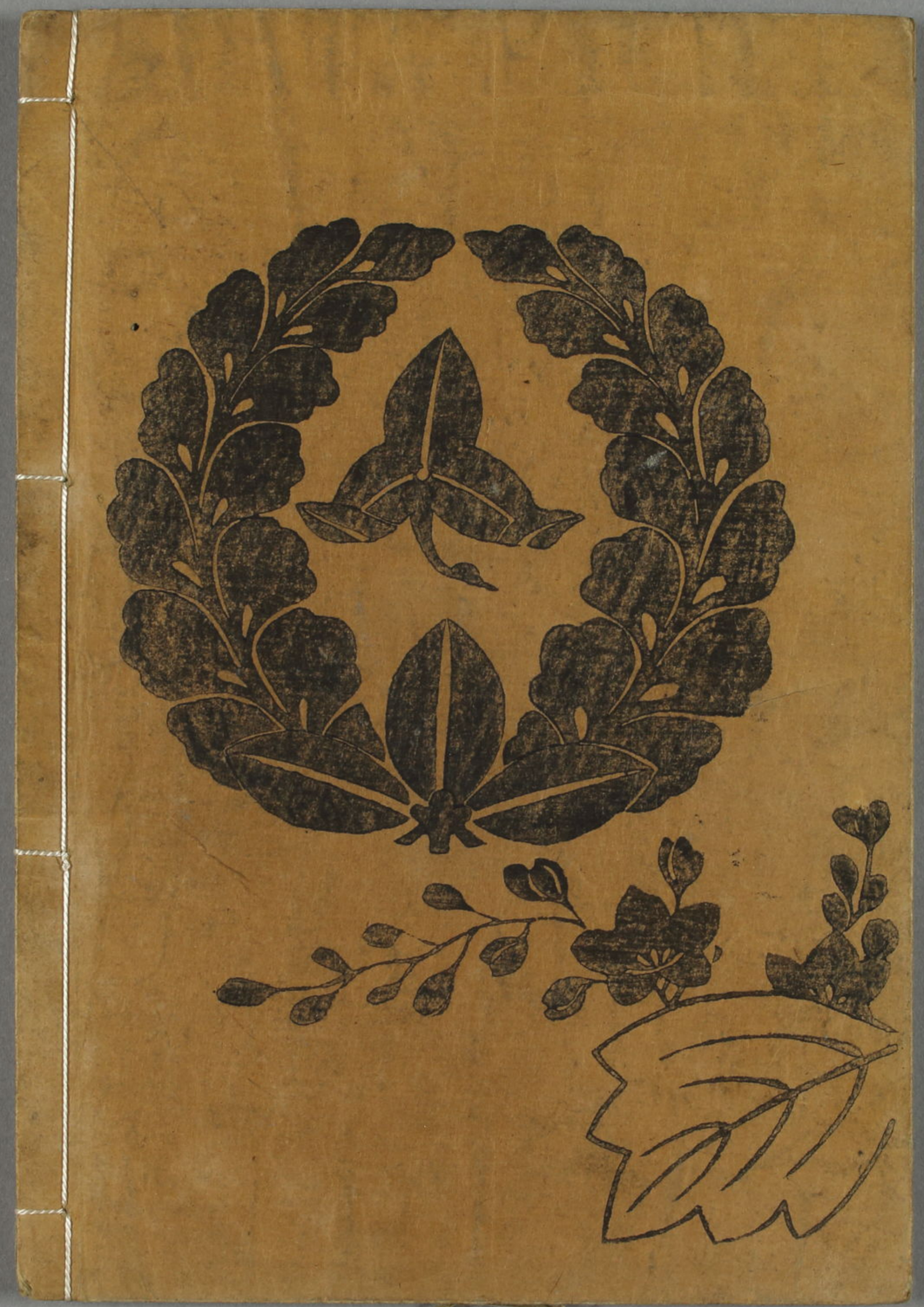
先小月もつみ奴れたとども
法なるべ　ア〜〜せ〜まい〜〜
ヨ
ヨ　ヨ〜〜と女ぶいるあをちうら事
風儀ひくり念仏いあをもつもる
車世ろ海ろ泥れ利級とぐつと
さうれてり出へてものりかつりセ將
八例こいいふ切先咽れ如をもづん
死ふものぶる家形れごう若修ふ
みぐれてくすこれ家を死恵し
引きて先通しなる一トカ乙ぐ教

くまなきはるのつきはなを見て愛い
消えてたり 改め面西うきゆうかふ
羽織打きせ死すのれをつくろん法て
はきせぬ袴り社被んをてて
すくへをたぐりよせ着ふ罷を引
すくなく寺社念仏を切り回向
有孫 [illegible]孫 [illegible]孫 法界
平等社恵を頂ふ植社こうり
一蓮たくせうち車を阿弥陀仏と
ゆるもづしてすむ

なりひさごの風ふゆゝまく
ごとくゆて浮世ふかたゆるこさうれ
みちいきせきとむる樋れにふ
「たのよ」せれるくいさんもたり
「ゆゝて」朝出れ漁夫が網れ目ふん身て
死んぶれ志んだ出ゆくゝと
色くふいろ廣ゆたるめれ浦
世ふ成佛とくだつれ誓れ
網じ法ん弟子と目毎ふ涙を
ものふ多新

近来市ニ流世よひ行まゝる
古板の正本ハ皆個字故此度
改て孝所録ある文花堂の主人
再板を願のもとハ為りぬと
于時　五代目
文政三庚辰年孟春　都太夫一中

昌大番本

正本板元
江都瀬戸物町
文花堂
塩屋庄三郎

島田藏書